

成果報告

総合政策学部 4 年 石田麻由奈

■研究概要

・研究タイトル

Downward gaze facilitates awareness of faces during breaking-continuous flash suppression

・発表学会

Consciousness Research Network 2023, Boya Teaching Building - National Taiwan University, Taipei, Taiwan

・学会の説明

Consciousness Research Network (CoRN) は、意識の本質についての知見を深めるために哲学、神経学、心理学、認知科学、医学、生物学、ロボット工学および関連分野の研究者をつなげることに重きを置いている国際学会である。過去には、2017年、2019年、2021年にCoRNが開催されている。ポスター発表の採択プロセスは、300 words のアブストラクトを提出後、査読がなされアクセプトされるかどうかが決定的であるという流れである。申請者が筆頭発表者として行った研究成果は、このプロセスを経て採択された。

・概要

本研究は、無意識下での下方向視線の視線知覚の優位性を示した研究である。本研究では、連続フラッシュ抑制（以下：CFS）というパラダイム（両眼分離器を通して優位眼に 10Hz で動く動的モンドリアン図形、非優位眼に刺激をモニターで提示する手法）を用い、網膜に視覚情報が提示されているが脳でその視覚刺激が意識されていないという状況を作り出すことで、視覚刺激が意識に上る程度にどのような違いがあるか探求している。先行研究では、CFS 状況下において逸視（自分を見ていない視線）より直視（自分を見ている視線）を持つ顔の方が早く知覚されることが報告されている（Stein, Senju, Peelen, & Sterzer, 2011）。しかし、逸視を持つ顔の中でも自分の体を見ている視線とそれ以外の視線についての意識的な差異は報告されていない。本研究ではその意識的な差異に着目して、下方向を持つ視線は体を見ていることになるため直視と同じように意識にのぼるまでのスピードが早いのではないかという仮説を立てた。まず初めに、実験参加者 30 名は Miles テスト（Miles, 1930）を用いて利き目を調査した。次に、CFS 条件下で顔を知覚した瞬間に顔が左右どちらにあるかを二肢強制選択法により回答した。最後に、知覚した顔の視線方向（上下左右、正面）を回答した。その結果、下方向の視線を持つ顔は、左・右方向である視線の顔よりも反応時間が短かった。この結果は、下方向の視線は、逸視であるにも関わらず、左・右方向の視線よりも意識に上りやすい可能性を示唆した。

■発表成果

今回の国際学会では、ポスター発表を通して国内外の研究者からのアドバイスをいただきました。特に自分が用いた CFS という手法を同様に用いている研究者を話すことができたことで様々な知見を得ることができました。意識の学会だったため、心理学だけではなく、神経科学、脳科学、哲学からの意識の捉え方に関しても触れることができ有意義な時間を過ごすことができました。発表以外では講義、そしてこれからの研究者としてのキャリアの時間も十分に取られており自分の研究を発表することだけではない今後に生きるような学びを生むことができました。これからの研究に大きく影響を及ぼす経験ができたと思います。

■謝辞

本研究は、国際学会での発表を慶應SFC学会の補助を受けて実現することができました。深く感謝申し上げます。